

智
慧
光

如來智慧の光明に

我等が無明は照されて

佛の智見を開示して

如來の眞理悟入るれ

人生の歸趣

佛陀は世界一切人類の眼として人生の歸趣する處を教へ、人類を無明の眠生死の夢より醒して無上正覺即ち無量光明界を開きて永遠の生命なる涅槃に歸趣する道を教へたまふ。若し人佛陀の指導に依らずば、闇より闇に迷ひ永劫生死に流轉して出期あることなし。

知力的の信仰——轉迷開悟

宗教の智力は世間の自然科学等の理性を以て認識すべき知力にあらず。即ち生死の源を覺り宇宙の大道を悟りて眞理の光を以て人生を永遠の光明に指導する知力なり。迷を轉じて悟を開くとは、衆生自ら何より自己が生れ來り死の趣向する處を知らず、冥より冥に入る。凡夫の無明の夢を醒して眞理の本覺に歸趣するにあり。

無明煩惱と解脫の光

人は天然に脱却せざるべからざる惡素質具有せり。爲に靈福感ずる能はず。人の苦毒は因は罪業により起す。罪過は煩惱より起す。煩惱は迷妄顛倒より、顛倒は無明より起る。

無明は彌陀の法身に乖離するより出づ。其實體根底なる法身に乖き無明となり、迷て顛倒し、主我ならざるに我と執し、諸の煩惱諸の惡業を作り、苦毒を受け因果關聯して自ら解脫すること能はず。苦毒と罪惡の感情はもと眞理にはあるべからざるものを自ら迷て苦と感ず。樂顛倒即ち主我幸福主義なり。人は天然としては本能に幸福を追求め常に渴望して止ことなきも満足の念なく、所謂苦々、壞苦、行苦止むことなく、實に天然幸福主義の爲には満足を獲べきものにあらず。何故に斯く苦は我が情に反して我を逼迫するやとならば、斯る苦毒は自己罪業因果の關聯として、また顛倒妄想より起る。

我に非ざるを我と執し苦の因をもて樂を迎へ、無常の規定の中に在て常住を求め、得べからざるも

のを得んと渴望し畢竟依屬(たのみ)に足らざる世界に依屬し、天然意向が眞理に反せるより顛倒妄想がおのづと苦毒を感じず。此煩惱罪業は脱却せざるべからざるものなり、之を垢と云ふ。眞理に有るべからざるもの心情の垢によりて罪過と苦毒と顯し來るなり。此垢不靈福の垢は、譬へば米の糠あるが如く、之を脱却するに非ざれば靈福を感じる能はず。

宗教の見地より見れば苦毒はもと彌陀に乖離(そむき)し自ら歸することを覺らず。自ら脱却せざるべからざる煩惱なるを識らず。之を覺醒し脱却すべき意志を起させんが爲の豫報として感ぜしめられたり。身に老病死の苦惱なく哀別怨憎の憂愁なき時は、心靈界を欣求する動機なし。煩惱と罪過との感情なければ靈德を欲望する時なし。苦毒と罪過の感情いよいよ熾なれば、解脱の希求も隨つて深からん。

苦毒と罪過とは心の垢穢より感ず。この垢穢を解脱するに非ざれば靈福を感じるに由なし。

之を脱却せんと欲せば自己本能の力の能くする所に非ず。ただ彌陀の恩寵に依屬する外に道なきを信じて阿彌に依る。他に依屬に耐ふべき方なきを識るとき、初めて至心に歸命信順の信仰おこる。自ら能はざる解脱を恩寵によつて脱却せんことを認識せば、たとへ生命を犠牲にしても救靈を乞はざる

べからず。主我を執して煩惱の奴僕となり、また無常のために噉食せられ、空しく黑暗の中に埋没しなんこと必せり。如かじ身命を捨てても靈光の中に投じて信順して彌陀の靈光と融合せんには。

神人感合の境

深く三昧に入つて神秘的に心機能的に合一したるこの妙遇はいかでかこの天機を洩し之が消息を他に傳へのぶることを得ん。植物は陽春暖和の氣候をまちて爛漫たる美色を呈し微妙なる香氣を發し無意識ながらに天機感合の妙遇をあらはし、人は肉殻を有せる高等動物なれば、窈窕たる淑女寤寐思服の春巫山の夢、天機の妙あり。斯の如き垢穢迷妄なる地球上の肉の比例を以て、晃天無極を超越したる超天然神靈的感合の妙遇に例するとすればこの土塊と無限の天空との比較も比とするに足らず。

天然の機制の我を亡じて絶對的彌陀眞我の中に投歸す。眞實最深の我は無我の我、入我々入。謂ゆる水を海中に投じ、風中に橐を鼓するが如し。初めて此妙境に入るや言語道斷、八面玲瓏、歡天喜地。

導師曰く、定中に在て此日を見ると時、三昧定樂を得て、身心内外融液して不可思議なりと。又曰く、想心漸く微にして、覺念頓に除き、正受と相應して三昧を證し、眞に彼の境の微妙の事を見る、何に由てか具さに説んやと。楞嚴に曰く、即ち佛心と交感し佛の氣分を稟くること譬へば中陰の身が父母を求むる如く、陰信明通して如來の種に入り道胎に遊んで親しく覺胤を奉ず、とは蓋し此妙遇を洩されたり。

啓 示

彌陀の恩寵と人の信仰との感合の状態は、彌陀の光は體一なるも人の心機は三能に分れ其用を殊にす。恩寵と信仰とは其體は異なるも其感合する機能は一にして、自己の精神機能に致一的にす。知力には啓示と實現し、心情には解脫となり、意思には靈化と現じ來る。

啓示に三種あり。感覺的と寫象と理想との啓示なり。

(一)感覺的啓示。

彌陀三昧に擬神し、彼の彌陀の實在が自己の精神に實現し來るとき、佛知見開發して實在を證明す。彼の實在を證明せんが爲に擬神し、先づ直觀に自己の意識に現じ來るものは感覺的なり。先づ明相現るあり。或は錢の大の如し。或は鏡面の大の如し。或は琉璃地内外映徹せるを見、或は白毫の光、或は寶像相好光明等、或は佛大身を現して虚空に徧滿し或は丈六八尺等を觀見する等は、定中の意識の所觀なりといへども、悉く感覺的啓示とす。

(二)寫象的啓示。

既に妙色莊嚴を觀じ已らば尙進んで彌陀の内證を觀ず。謂ゆる四智十力等なり。一切智と一切能との徳と神聖正義恩寵との屬性を以て彌陀の性徳を顯はす。大智慧の光明普く法界精神界徧照して自然にして眞實に知らざるなく見ざるなきを觀ず。

起信に曰く、「不思議業相とは智淨相に依るを以て能く一切の勝妙境界を作す。謂ゆる無量切徳の相常に斷絶なく衆生の根に隨つて自然に相應し種々に現じて利益を得しむるが故」とは是なり。

一切能とは起信に「自然に不思議の業種々の用あり。即ち眞如と等しく徧ねく一切處に徧し又用相の得べき有ることなく、如來は唯法身智相の身。第一義諦、世諦あることなし。但衆生の見聞に益を

得るに隨ふ。故に説て用と爲す。」

一切智とは大智慧光明（心性不起）の義。徧照法界の義（心性見を離る）眞實識知の故に等。神聖態はこの神聖、大智慧を觀する時、絶對理性を觀すれば、自己の良心を醒覺して、道德秩序を發見し、神聖なる彌陀の聲を認識す。ここに於て道德の根底はみな彌陀の光なるを見る。彌陀の神聖光に合ふ時は自ら侵すべからざる神聖態精神となる。

光にあふて阿頼耶識の垢去れば、

大圓鏡智。一切依正二報事理すべての法は悉く如來大圓鏡智の裡に炳現するを見る。

平等性智。第七意識の垢去れば自他不二本性無我同一根底なるを知る。

意識の垢滅すれば、

彌陀妙觀察智を。謂ゆる能く諸法の自相共相を觀じて衆生に妙法を説いて覺悟せしむ。

成所作智。五種識の垢を除けば、佛の能く一切種々の妙用を現じて衆生を度したまふを觀ず。

佛は十種の智力を以て一切衆生の是處非處と三業の所作業を知りたまひ、衆生の性欲の善惡を知り給ふ。

一、神靈態は勢能の智慧なり。是絶対理性にして神聖圓滿なる精神態光明なり。至精純一絶対にして、この光り人の個人の良心と現じて道德的行爲自律的になすことを觀ずべし。

二、正義。是智慧の用となる光にしてよく不正をさけて正義ならしむ光なりと觀ずべし。

三、恩寵。我ら無明と罪惡によつて亡びたるものを正知見の眼を與へて回復せしむ。無縁の慈悲を以て諸の衆生を攝するめぐみの光なりと觀ぜよ。

(三)理想的啓示。法身觀。

是彌陀の實體理性即ち法性法身なり。自性身は無始無終にして、一切の相を離れ、諸の戲論を離れ、(周圍)無際にして煥然常住なり。冥想的觀念、絶対理想なりと觀ずべし。

非空間非時間なると同時に遍空間遍時間、永恒常然、眞々如々の理性體なりと觀ずべし。此光能く衆生本性清淨にして同一根底にして彌陀の一分身たることを照知せしむ。

是の如く心機能的致一に彌陀の實在を觀念的に證し明したるを啓示ともまた三昧發得とも名づくるなり。

三種の啓示

知情意の三能に感合して此三能を資益する彌陀の光即ち恩寵は、一體なれども之を領納せる機能によりて其用を異態にす。この彌陀の恩寵と人の信仰との感合は水月同交の關係にして、之を感じる處の機能は人の精神の内面に於てす。至心信樂と彌陀欲望の精神が機能致一の狀態は、自己の心象に實現すべきものにして、諦かに此が實現を證明す之を啓示と云ふ。即ち佛知見開示の義なり。

智の啓示に三種あり。一に感覺的啓示。感合の順序に先づ第一に直觀に意識に現するものは感覺的なり。導師觀經の疏に、諦かに日を觀ずるに其利根の者は一坐に即ち明相現前を見る。境現する時に當つて、或は錢の大の如し或は鏡の面の如し。彼瑠璃地の内外映徹せるを見る。或は白毫の光を見或は寶像の相好光明を見るあり。或は大身を現じ虛空に徧滿し丈六八尺等を觀ずるあり。之らはすべて感覺的啓示と云ふ。是定中意識の色相なり。

次に寫象的の啓示。彌陀の光を觀ずる時は、彌陀無塵の相好妙色莊嚴を觀見すれば、進んで彌陀の

内面内證を觀ず。謂ゆる四智十力等なり。彌陀大智慧光明普く法界精神界を照し、神靈態正義恩寵等無極にして衆生を攝取したまふ。彼の神靈態を觀ずれば絶對理性の精神態大圓鏡の炳現す。神靈威嚴の精神態に對すれば侵すべからざるの想を起し、至精至粹純一無雜の至眞靈態なり。純精理性の精神態彌陀の光明は正義と不正義を照しわく。即ち選擇本願の意を表し彌陀は十智力を以て正不を照見し其不正を措いて正義を撰取し、無縁の慈悲の恩寵を以て衆生を攝し給ふ。また佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智を了すとは、是寫象的に彌陀の内證を觀察し、觀成じて彼の神靈態と相應すること機能的に致一したるを遇斯光と云ふ。

三、法身觀念的啓示 彌陀の内證を寫象的に觀ずれば次に彌陀の實體を觀ずべし。

自性身は心地觀經に其自性身は無始無終にして一切の相を離れ諸の戲論を絶す（ ）無際にして凝然常住なり。消極としては非空間非時間態、積極としては遍空間遍時間、無盡の法門悉く圓備して彌陀に在り。縦にあらざる横ならず。一に非ず異に非ず。實に非ず虚にあらざる。亦有に非ず無に非ず。本性清淨心。○絶たり。之を法身理體と云ふ。

開示悟入

念佛三昧を以て彌陀の光明を被むれば信心開發して佛知見を開示され、秘密藏の中に悟入することを得。

人佛釋尊は即ち教主にして、衆生の心身を開發したまふは、絶對の靈界に在ますあみだ如來の心光に接觸すべき眞理を教へたまふ。彌陀は常恒に心光普く照して十方衆生を（攝化）したまふ。衆生一心に念佛三昧に入つて、神（こゝろ）を凝らして不斷なれば、三昧發得して佛知見開發して念佛三昧にて如來の聖境を開示さる。其形式を明さば

開（感覺的啓示）

感覺的とは、三昧定中に如來の相好光明、また瑠璃寶地、宮殿樓閣等の莊嚴、或は明相、又は華を見、或は天樂の音聲を感じ、または妙香異馨を感じ、甘露妙味を感じ、またはは柔軟衣を以て身に覆はるる等、色聲香味觸の感覺的に感ずる類を感覺的啓示とす。

示(寫象的啓示)

如來の相好莊嚴等の感覺より進んで如來の智慧慈悲等の内包の聖徳を感ず。觀經に「佛身を觀る者は亦佛心を見る。佛心とは大慈悲是なり無縁の慈を以て諸の衆生を攝す」等。また如來の大圓鏡智等の四智乃至すべての内證の徳を示さる。亦説話的に啓示せらる。聖善導の定中に佛曰く、樹を伐らんには連に斧を下せ、縁なきには共に語ること無けん。家に還んには苦を辭する莫れ、又綽をして三罪を懺悔せしむべし、方に往生すべし等。觀經の疏を造るに結願して靈驗を請求するに夢定中に種々の靈相を感じ、毎夜夢中に常に一の僧あり來りて玄義科文を指授したまふ、是等は説話的の啓示なり。

悟(法身理想的啓示)。

如來法身の體に證入す。法身の體に證入とは、群疑論に、問ふて曰く念佛三昧所見の佛は三身の中には何の身を見るとせんや。釋して曰く、通じて念佛三昧を論ずれば三身俱に念ず、無相の念佛三昧を得んとならば法身の佛を念ずべし。有相の念佛三昧を得んとならば報化の身の佛を念ずべし。又修觀の者能より細に至て、先づ身色の觀を爲し後に法身の觀を作すべし、修學の次第なりと。禪の見性は直に自性天真清淨法身を見る、之を見性悟道とす、之に準ずる清淨法身を見るを悟の位とす。

入。

已に如來の體中に入り、如來藏性を開き、如來は我父にして我如來の子なり父の所有は我所有なり。十力四無畏十八不共法等一切の佛法藏に入れて自（ ）を得、即ち無生法忍を得また陀羅尼門を得る等なり。天臺大師は光州大蘇山に於て法華三昧を修し法華經を誦し藥王品中是真精進是真法供養如來の句に至て身心豁然寂定に入り、靈山會上に大衆と共に法華經を聞く會坐儼然として散せざること徹見すと。其後旋陀羅尼を得て辨才無碍を得たりと。

佛知見啓示

宗教意識に正しく客體の本質性能を悟達證明する事を得るを啓示とす。即ち客體との關係に正智見開展して、客體の本質眞理示されて其眞理を悟入するの義なるが故に。

正知見の眼なくば菩提の正道焉んぞ夫れ進行するを得ん。此正知見の開示は是宗教生活の眼點にして、是より神の中の生命に進むを得べし。

佛教には如來は一大事因縁を以ての故に出現したまふ。即ち衆生の佛知見を開示して、佛の正道に悟入せしめんが爲なりとは大乘圓滿の教なり。一大事因縁とは本來主體と客體の關係の一大元理は、絶對精神態の阿彌の唯一本體は、一方には一切智能に發展し、産出せられたる世界の個人衆生の心性にして本自正因佛性として神的性能具備す。また一方には本體には個々の一切の心機を高等に開展し解脱靈化せしむべき勢能を以て衆生と關係を結合せんとする理性あり、之を縁と云ふ。因とは正因佛性として一切衆生は悉く理性ありて、客體と關係すべき性能あり。喩ば木に火の性能ある如し。縁とは

客體には一切を解脱靈化すべき性能あるは火の木を焼くが如し。この關係によつて衆生は知見を開示して菩提聖道に進入する故に、一大事の因縁の故に世に出現したまふと。

正 因 佛 性

是宗教意識の設定、神的衝動なり。佛性即ち神的衝動は自ら客體の内容を憧憬しつつ、客體との感應を得んとする衝動にして、常に、より進んで、高度の意識に進勝するものなり。この神的衝動を佛性の性能として客體との關係をなす。この感應する處の機能は一にして、能感と能應の本質とは一機能の主客兩方面にして、譬へば木を離れたる火に非ず、火を離れて木の焼くことなきが如し。故に主體即ち自己の心機を離れて外に恩寵を求め、恩寵を離れて自己のみにしては決して佛知見開示し悟入する理あることなし。自己の精神外に啓示を求むべからず。精神と云ふも肉團心縁慮心を云ふに非ず即ち絶對心と致一なる精神をいふ。

緣因即ち啓示材料

啓示は自己の心機に發現して初めて自己の啓示とす。歴史に現し經史に現れたる啓示は外部の啓示にして未だ自己に關せざるなり。他の木の火の如く、自己に發現するに非ざるよりは自己に功能のあるなし。例へば人ありて三昧の中に淨土の二報を感見し常に阿彌の光攝を被るとの話頭、或は大悟徹底の説話をいかほど微に聞得るも、そは唯外部の事にして自らに關せざるなり。正しく自己の心機に顯現して初めて啓示と云ふべし。其要素は即ち材料は、禪門の如く四十八則一千七百の公案の如く、一の公案に專一丹心工夫し一心凝神して一旦廓然として悟入するあり。或は教觀あり、一念の心を觀じて三千の理を觀ずるもあり。或は法界觀一眞法界を觀ずるあり。また心佛衆生是三無差別三平等觀に靜慮するあり。何れも要する處自己の心機に、その關係によりて開展して其眞理を知見し悟達するにあり。心機開展を要するなれば、何の材料に緣るも可なりと謂ふ類も有れども、若し心機鍛鍊術として見れば然らんも、宗教としては神的動機によりて宗教活動を要せんには、唯一の恩寵に緣るの外

に正知見與へ得らるる道なきを示さん。方便の門多しと雖も歸する處唯一のみ。

宗教關係にして其緣する處即ち材料は、佛と問へば、干屎橛とし又は麻三片と答へたる如き、それは一切物として佛ならざるはなし、(非)門より云はば何れか之眞の佛ならんれば又然るべし。

然れども眞面目なる宗教として神聖唯一の恩寵に緣る外正知見開示悟入する道なきを信ずるに如かず。

若し無念の知見を得れば酒々落々、愛惡自然に淡泊にして悲智自然に増明すとの如く、是不可なるに非ざるも、客體に對する畏敬の念を缺き、すべての感情的信仰の要素缺けて、冷索落寞に流れ乾燥無味となり、神的活動新鮮なる活氣を失ひ、無限に對して抑損す。神的憧憬とは客體に歸命信賴し甚深なる悲壯の感動を生ずる如きの感情。信仰の動機と成るべき風流雅致の宗教意識を作るには可なり、然れども神聖正義恩寵により至眞至善至美また神韻壯快なる意識を作るには不適當なり。

善導大師は觀經及び般舟經等に依りて、客體の眞金色圓光徹照し端正なるを思想觀察することを教へ給ひし。廬山の遠公も阿彌陀佛を專念凝神せしこと傳に見ゆ。

宗教としては初めに感覺的神的表明は最も純粹なる宗教意識を作るに適すべし。

客體に對する觀念には阿彌は本質は精神態なるも、關係についての觀念には可成程は圓滿なる客體性能を表明すべき表示を要す。感覺としては、阿彌陀佛眞金色にして圓光徹照し端正無比なりと想ふべし。また阿彌陀佛は神聖態にして正義と慈悲と全智慧全能なる威神無極神なりと觀ずべし。

啓示の眞否

楞嚴起信等に、行者加行の中に在りて魔の爲に障碍せらるることを明す。楞嚴には色受想行識五陰に各種々の妄象顯現して人の精神を惑亂すと云ことを説けり。また諸の魔外道鬼神の爲に惑亂せらるるに、若くは坐中に形を顯して恐怖、或は端正男女等の相を現す、當に唯心を念ずべし、境界則滅して終に惱まされずと。或は天像菩薩像を現じ、或は如來像相好具足し若しは陀羅尼を説き或は宿命過去の云何を知らしむ。或は世間名利の事を貪着せしめ又人をし屢瞋り屢喜んで性常準なく或は多く慈愛多睡多宿多病にして其心を懈怠ならしむ等。これ専ら神的觀念の中に於て或は身體と精神との不健全に訓練さるる爲にして、精神に専ら擬神靜慮するに、或は曾て印象したる種々の象相の再現するに

に外ならざるなり。正しく一の要素ありてそれに對する觀念ならば本より正當と云ふべし。然るに期せざる處の物象が發現するは不可なり。是全く修練の未熟なるとまた腦の性質の自然ならざるによる。惡魔と云ふも外に在て爾るに非ず。全く自己精神の用意の完全ならざるなり。若しよく碎○精修熟達する時は念に隨ひ意志に隨つて自在なるを得べし。

魔と云ふも自己の精神の未だ調適し熟達せざる爲にして、斯の如きの業相魔障と名づくべき精神の妄想的作用を碎破するに非ざれば、純粹なる精神態として豫期する處の客體の本質と感應し致一すること能はざるべし。

注意すべき事は、たとへ豫期するところの本質眞實に發見することを得るも、其獲得に悦びて内心緩々する如きは是魔といはざるべからず。若し何にしても全く自己の神的觀念の啓示たる價值ありて、宗教生活の眼目と成るときは、是魔とか或は妄想といふべからず。

或は精神の錯覺し易きと或は病的なる妄覺なるあり。幻覺より起る等はすべて之を從來魔と傳へ來れり。

大乘佛教は啓示

小乗教の朴質なる意識より進み來りし大乘佛教は最も理想高遠にして幽玄深遠なる理に富繞なる宗教意識なれば、現實世界を超越したる精神界の内容即ち觀念世界の方面のみを示せり。故に其所説の要素は概して三昧定中の内面を説明したるものにして、其内容を窺はんとするには、三昧に入て觀念世界に通入するに非ざれば、其本質の義に悟達すること能はざるは大乘佛教の特質なり。華嚴は、華嚴三昧海中の内容にして、法華は法華三昧の客體の表明にして、何れも其内容は三昧定慮に入るに非ざれば窺ふことを許さず。故に蓮華藏世界に遊入して、理事無碍法界の、また盧舍那の宮殿に昇らんと欲せば、華嚴三昧の寶輪を要せざるべからず。

靈山會上に親しく法身具相三十二萬德圓滿に大衆の爲に圍繞せられて常恒説法の啓示を獲んとせば法華三昧によらざれば大事の門開くこと能はず、故に大乘佛教に教ゆる所の常住現在の佛陀に接せんには佛知見を開示せざれば其本質意識に達入するなし。故に大乘佛教の眞實内容を識らんと欲せば須

らく精神の内容に入るべき三昧によらざるべからず。

昔惠遠法師廬山に在て白蓮社を結び、専ら精神を西方の聖客に擬神し、至精至微幽を極め精を盡して、多年三摩耶の中に於て佛陀の聖貌を觀じ、淨土瑠璃寶地及び瑤池水流光明妙法を演暢するを觀じ、其他の此會に關與する高僧逸士、遠公の高志皎潔なる志操を慕ふて同じく淨業を精練し一心純熟して或は聖顔を感じ淨境を觀見するもの甚だ多し。又南岳慧思禪師定中にあつて彌陀及彌勒の摩頂を被るが如き、又隋の智者大師法華三昧を行じて經を誦し藥王品の是眞精進是名眞法供養如來と云ふ文に至つて、即ち豁然として大悟して靈山の一會儼然として未だ散ぜざるを見る。

唐の善導大師。

啓示に種々あり

天然教は、神の啓示として信ずる處は本より幼稚にして、其感覺相に或はトーカミの神ヨセに神は人に托して豫言を示す、或は物教などと言ひ、又儒教の龜竹筮に神の卜筮に啓示せり。易の理の如き

は是儒の啓示なり。何にしても天然的幼稚なることは論を俟たず。

儒に國家將興、必有禎祥、國家將亡、必有妖孽、見_レ于著龜、動于四體、禍福將_レ至、善必先知之、不善必先知之、故至誠如_レ神

小乗教、資糧位煨位別總念所觀によつて能く似解の十六諦觀を發し佛法の氣分を得譬ば火を鑽るに煙起る如し。又春陽の煨發るが如し。慧をもて境を鑽ば相似の解を發す。解は即ち煨に喩ふ。又春夏華草を集めば自ら煨生ずるが如し。四諦の慧をもて善法を集め、善法薰積して慧解起ることを得、故に煨と云ふ。頂法は轉た分明に煨の上に在て、山頂に四方を瞻るが如し。忍法は似解増長し自ら忍可す。世第一は有漏の極なり精神世間を超越せんとす。

見道に見惑を斷じて眞理を見る。修道思惟して四眞諦を緣す。無學道眞を研て惑を斷じて學とす。眞窮り惑盡を無學道と爲す。小乗の客體との關係に偏眞の無我の理を見るを開示して悟入するにあり。法華には天臺の釋によるに、三諦の境を觀ずる三觀の慧を用つてす。不思議の境を觀るに、謂く、一念の心を觀ずるに三千の性相百界十如を具足して滅すること無し。

進化發達せる精神宗教にては、客體との關係に知見を啓示せらるるも觀念的に啓示せらるるが故

に、先づ客體の要素は聖典に示さる。例せば無量壽佛眞金色にして相好光明の相を聞き、或は形像に表明せるものを寫象し、之を反映し客體化して啓示とする如く、客體の本體は本より精神の對象にして之を法界身と名づく。感覺的の妙色莊嚴といふも經驗界の感覺にあらず。天然教の如く五官に對する感覺に默示せらるるとは異れり。

暫く、天臺の三諦に對する三觀。

又華嚴の理事等の四の法界觀、理論的觀念にして、宗教の啓示としては不適切ならんも、其大意を述べば

華嚴の絶対眞心、即ち唯一眞心即ち一眞法界は總じて萬有を該ね即ち之一心。然るに心萬有を融して即ち四種法界と成る。一に事法界（界は分の義、一々分齊差別あるが故に）二に理法界（界とは性の義、無盡事法同一性の故に）三に理事無碍法界、性分無碍故、四事々無碍法界、一切差別分齊事法一々如性融通、重々無盡故。

智慧光——智力的信仰

如來の智慧光との關係に、人は佛智見開きて如來の眞理を信認し悟達するを要す。即ち如來の過境の實在を證明し、與えられたる知見によつて佛道増進の光明となる。即ち是如來の啓示なり。

信は澄淨認許の二義とは知的信仰に名づく。澄淨とは如來の恩寵の關係機能致一に自己の心念疑雲すでに鬻れ信水すでに澄み、如來の眞月を澄淨なる心水に實感し、信心清淨なる故に、ここに於て實在を證明し其本質意義に悟達し其過境的眞理なるを機能に實現し冷煖自知なるを認許の義とす。

また知力信仰は（科學的の認識に求むるに）宗教的關係の三昧定中によりて其實在を信認するにあり。三昧とは宗教的關係の機能致一の狀態の意義なればなり。三昧は主體には觀照また靈感を得、客體には啓示なり。

智力的信仰は宗教的關係の觀照即ち客體の本質形式を知見す。即ち神の觀念を或は相好光明または内包の徳たる慈悲智慧神聖を反映し客體化して啓示するは機能致一の觀照なり。舍摩佉、毘婆娑那、

即ち止觀なり。止は禪那、一切の不〇の念慮を排し一心凝集。

經に佛法の大海には信を以て能入とし、信は道源功德の母と。實に自らの理性承認するにあらざるよりは、心情に於ても歸命憑依して安立すること能はざるなり。全く心情の安立をうるは如來の實在を信認し、其權能に一任するときは必解脱を得ると自ら承認すればなり。若し之を疑ひ確信あらざれば宗教生活は望むべからず。

(直指人心見性の如きは蕪直に自己の靈性を捕捉して、自心本是佛なりとの如きは觀照の()
觀照、見性、感應)

啓示は宗教的意識を向上せしむるところの光明にして、一たび啓示を獲て之に止るべきにあらず、啓示は不斷に宗教意識を高きに導くところの光として、人は與えらるる知見によつて向上し、人の信念のすすむに隨つて啓示は高等に顯現す。

宗教的意識は不識的の蓋然たるより、正しく意識的に啓示せられ其實質を證明し悟入するに至る。
信仰に三種の信認あり。

一 仰信、二 解信、三 證信

仰信とは不識的に客體に對し歸依渴仰し對象を科學的に求むるを要せず。一心一向に過境的實在を信じ理性の批判を顧みず。

是宗教的意識の根本は心理的に觀ずれば宗教的衝動として、靈的衝動は不識の中に神的憧憬の念萌發し高さあなたに雲井はるかに歸依渴仰の信念と現れ、いかにもして宗教的關係の眞實を得んと欲求す。

法華に所謂る、一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まず、また其人の戀慕を發すは是宗教的性能即ち本因。この本因は形而上より論ずれば、法身藏性より賦せられたるもの、物と共に進化の人類として顯現したるものならん。

宗教的性能が代々遺傳として向上し來りし素質こそやがて如來の啓示の恩寵に預るべき豫備にして、いまだ意識的に實在を證明するにいたらざるも、宗教的關係の素因たる仰信なり。此仰信こそやがて眞の佛子たる啓示をうくべきの卵、佛知見のマニ寶珠となるべき璞質なり。

解信とは不識的盲從的仰信より意識的に如來の本質意識を悟達せんと欲するに科學との對照によりまた自己の理性をして満足せしむべきところの眞理を理論の學說の方向に於て先づ宗教的眞理を認識

す。理論としては如來の啓示がいかに人の知見をうべきや、如來の本質性能は之を名字の上に示さばいかなる表號を以て其内容を表明するや。また聖典に録するところの止觀の相貌啓示を表明することを録せる經典に如來の相好圓滿なる表象を以て應身を啓示す等の如き、教理文字に研究精密にし、啓示の表明及び證得の功果はいかなる精神状態となるかの如きを明らかに解して、理論としてはもはや疑團をとどむべき餘地なきに至れば即ち解信なり。

しかるに解信は更に進んで眞實なる宗教的關係即ち三昧の中に於て啓示を與へられるべき豫備として眞實價值あり、解信は、宗教の實地の意識にあらざるを以て、これを以てすでに得たりとせば、増上慢に墮し、理論の病的に陥り、文字の葛藤に縛せられて、いたづらに他の寶貨を○ひて自ら半錢の價を得ざるに至らん。現代の宗教を求むるもの理論を以て眞理を認識せんと欲するものに多し。學の理解は實地の知見の眼を開くべき豫備なることを識らず、哀むべし。

解信の以て得とする處は、歴史的に普○的啓示なり。聖典語録及び歴史的に世界に顯はれ行れある教權文字の眞理は光明を與へつつあり、故に學ぶべし。

天臺大師は闍禪と名字僧とを嫌へり。闍禪とは佛教廣大甚深なり、聖典及古尊宿の示したる龜鑑に

依りて自己の啓示を證明しまた向上し無邊の佛法海に優遊せんとするは闍禪者の能はざる處なり。

また佛教の眞理を知見するは觀心修練の功果として三昧成熟し宗教的實驗して佛知見與えらるるものとす。しかるに唯教權文字の中に如來の本質を發見せんとする如きは甚だ不可なり。教經語錄等すべての解義なるものは其實啓示の材料とはなるべし。材料を以ていかに精密に研究すとも直ちに心靈を照す光明と云ふべからず、晝には太陽の明を求むべからず。

證信の手段となるべき解信に依憑と直授の二種あり。前者は聖典及び祖師の語錄等の依るべき處によりて自己の宗教の眞理を認むべきことを發見し、是によりて自己の正しく理解によりて確信を立つべきもの、空師が導師觀經の疏の一心專念の文によりて彌陀の眞意を解信したる如き。後者は傳承的に面授せられて師資相傳して宗教的眞理を傳承す。喩へば大乘の菩薩戒を發得するは傳燈師によりて受戒の時に羯磨の一刹那に發得し菩薩戒の本質を解信する如きを云ふ。前の教經に依りて如來の本質はかくかくなりと如實に解信し、これによりて得たる如來の本質を表明せる三昧の内容及び形式の理を解し、之を以て如實修行の材料として如實に修行するときは廣大甚深なる如來の大海をも如實に知見すべきことを得べし。

また傳承的の直接としては、生ける經典なる善知識は親まご三昧海中に如實に啓示を得たる身としてその經驗を以て、自己の爲に、啓示を獲べき處の刺激を與えるものなり。直接の刺激は大に親躬の啓示の助成となることは功あり。しかれども直接の傳承といへどもそれは資縁にして全く自己の直接の啓示にはあらず。

佛陀のたまはく、我説法は月を指す指の如く、指は正しく月を指して教ゆべくも、指は指にして月にあらず。眞實の啓示は指すべくも觀ぜしむべからず。若し之を強いて相傳の名を用いば以心傳心。師の内の證明せる直接の關係によりて、資にもそれと同じく如來の本質を知見したるのみ。指示によりて正しく自ら月を觀たるものなり。

若し如來の本質眞義を名字に實現し物理的に表現すべきものとせば、傳承すべきも、例へば火てふ語即ち全く火ならば人を燒かん。擬すべく、現すべからず。自ら親躬的に、啓示にて始めて實現す。之を證信と名づく

證信。

宗教的關係の實現を證明し實在本質を信認し正しく知見を與えられたるを證信と名づく。

經典文字の解釋は天臺大師の六即の中に名字即にして、いかに經論の文義に精進し講説を巧にするも名字即の分齊にして全く自己の活ける啓示を得たるものと云ふべからず。自己と同じき親躬的啓示を得べき豫備とはならん。また教相の文義によりて啓示の相を信受せざれば躬(みづか)ら啓示を得べき助成機關なし。要するに自己親躬的の啓示即ち冷煖の自知の實地にいたらんことを。傳承の啓示いかに名師により傳燈を稟くるも傳燈の名師は眞證の邪正眞偽を證明すべきも、躬親的啓示は自己と客體との宗教的關係に於て直觀若くは直覺に感ずべきものにして之を傳ふべきものに非ず。

證信はその實躬親的啓示として自ら證得するものなり。證信こそ佛の一大事因縁にして自ら信心獲得し自己の靈性を開發し如來の聖靈が自己の心中に實現するにあらざれば眞の佛子と云ふべからず。眞實の啓示によりて直接なる如來の交渉を理性主義の宗教には見性また悟道と名つけ佛知見開示悟入また悉地三昧發得と名つけ、感情宗には恩寵獲得また相好感見また聖靈感等種々名をつくるも、啓示によりて證信をうるにあり。

釋尊は伽耶城の不遠の地に於て臘月八日の曉明星出でんとする時には無明長夜の眠より廓然として覺醒し無上正眞の道を獲給へり。其證得する處の内容大乘小乘に於て之を表明する所の相貌異ると雖

暫く大乘華嚴の説によれば、如來大悟の晨、佛華嚴三昧に入りて自證の分齊を顯現し、小乘の聲聞等は佛陀の肉體のみを見て眞の如來の内證境界に於ては少分も窺ふこと能はず。

形已上なる眞の如來は舍那圓滿の法の身は法身の菩薩に圍繞せられ蓮花藏界に安住し重々無盡の徳を以て莊嚴し給ふ如きは佛陀自證の相のみ。他の窺ふべきところに非ず。

また廬山の遠師念佛三昧發得し三度如來の聖貌を拜み淨土の莊嚴を感見す。また天臺大師法華三昧を修して靈山の一會未散を觀見するを方便として旋陀羅尼を證得す。また善導大師が般舟道場に入つて淨土の依正二報の莊嚴を感見する等はみな是證明信仰して宗教の眞理を自ら證明す。

唐の懷感禪師の如きは始め解義をのみこととし淨土の宗義に於て痛く疑惑を懷きたるに、竟に導師のために感發されて念佛三昧を修すること三年ついに淨土の莊嚴を觀見し而して始めて證信に入る等。

またキリストのヨルダンにて聖靈鳩の如くに感ずる等。

また伽葉尊者に釋尊の示し給ふ拈華を見て開悟したる如く、其の形式は種々にして一定せざるも精神に一點の光明を與えられて眞の宗教的生命に入ることは異らず。この眞實の啓示即ち證信によりて

知力的の結果(に)して無上菩提の曄腫とはなりぬ。

啓示の眞理

宗教的關係の能所一致の如來の啓示の恩寵が人の證明とすれば、啓示の實現せる相の其人によつて異なるは何に由るぞと疑ふ者あり。

答へて。

如來の本質は本同一即ち一大觀念即ち大圓鏡として法界に周遍する處の智慧態にして形相の得べきなし。衆生の心相に隨つて種々の異相を現ず、即ち衆生心想の各々異なる故に其心念に應じて所現の表象また同じからず。例へば大なるハリ鏡面に映現せる面相向ふ處の人々に依りて影像異ると同じく、是れ鏡體もと一に人々の見る處の影像同じからざるが如し。如來の本質は平等の觀念態なれども衆生自己の所念を反映して自己相應の相を感見す。如來の本質一切所に遍するが故に衆生一切所に於て隨念の顯現限なし。

觀經に曰く、如來是法界身、入一切衆生心想中、是故心想佛時、是心卽是三十二相八十隨形好、是心作佛、是心是佛、諸佛正徧智海從心想生。

衆生若し如來相好身を以て如來を念ずる時は如來は相好莊嚴の相を以て之に應じ、また如來の内包の徳を念じて心念を凝さば如來は智慧神聖恩寵等の相を以て啓示す。或は法身を觀ずる時は如來は無相法身本質のみを以て衆生に觀ゆることを得。

起信論に曰く、如來は本智慧體にして清淨無相、無相の故に一切相として觀せざるはなしと。

また曰く、如來本法身智相第一義にして用相の得べきなし、ただ衆生の見聞に隨つての故に用相を現す。

ここに注意すべきことは、如來の本質は心靈態なるを以てこれに相應せる自己の根底なる心靈に於て機感相應して啓示せらるべし。心眼にあらずして肉眼を以て物質の中に如來の相を發見する理あることなし。

啓示の表相

如來の本質は法界に周徧せる觀念態にして衆生の心念に應じて機感相應して種々の相を見む。しかばいかなる表相を以て顯現するとならば、所觀の境相無數なりと雖粗三種に分つ。如來は三身を以て衆生に對するが故に之に應じて三種の形式を以て義意を盡さん。

一、應身に對する感覺的啓示。

人の精神の内容は、其所觀に對する知覺とまた(追)想たるとまたは想像たるとにかかわらず、先驅として精神に感發し來るは直觀即ち感覺的なり。即ち人の心念に應じて或は明相現することあり、大さ或は錢の如く或はまた鏡の大の如し、光輝映徹す。或は希有なる花を見、また瑠璃寶地を觀る。觀念法門に、如來眞金色にして圓光徹照し端正無比なるを觀せよと。

感覺的啓示は二に分る。一は依報二は正報。依報とは淨土の莊嚴寶地寶池寶樓闍華座等を觀ず。正報とは佛菩薩の聖相を觀ず。觀經に、如來の身相は閻浮檀金色、八萬の相好光明普く十方界を照し、

また觀音勢至等の聖衆各々八萬の相を以て法身を莊嚴し給ふを觀ず。或は丈六八尺相好圓滿して池水の上に立つを見、または如來虛空徧滿の身を現ずる等。

自ら觀じまた他に教えて觀ぜしむるに先づ第一に感發するは感覺態なり或は花を先に感ずる者あり、また明相を先づ感ずるものあり。所感の表相は○にて異りと雖、精神清朗にして身心融液なる如きは異なることなし。

觀無量壽經また觀佛三昧經等は感覺的啓示の表相を廣く明し給ふ。

天臺大師法華三昧定中に靈山一會未散を感見し、導師般舟道場に寶地華座等を感見せしは感覺的の像なり。

感覺的心像は如來の本質に屬する作智の作用。衆生の心念に應じて顯現する大用顯現にして、之を觀ぜば尙進んで、如來の本質内容たる心象を觀ずる、即ち

二、報身内包の徳の抽象的啓示

如來應身の表象たる光彩燦爛たる相好光明等を觀見してよりは、報身如來の普遍的寫象の萬徳を觀ず。即ち觀經に、佛身を觀るものは亦佛心を見る、佛心とは大慈悲是なり、無縁の慈を以て諸の衆生

を攝す、と。

無量壽經に、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智等を明に信ず。

報身内包の徳を四徳を以て○さん。

智慧、慈悲、神聖、正義。

此四徳は本然として法界に周徧せる精神的光明なり。すべての宗教的意識を照して心靈を開發する性能なり。

智慧に、鏡、性、察、作智とあり。

大圓鏡智は一大觀念態にして、一切色心の二象は鏡面の影像なり。平等性智は内性平等にして一切色心の本性と秩序を統一し普遍的法軌を持つ。妙觀察智は一切萬法に一と一切と相即相入、重々無盡の交渉を以て衆生の知見を開發す。成所作智は一切感覺の根元にして、五塵と五識は此作智による。衆生心靈開發すれば、一切所として淨土ならざるなしと。之を略して四智の相を觀ずと名づく。

次に衆生倫理の光明となるべき神聖正義慈悲を觀ず。神聖とは眞理の光明を以て儼臨し道德自律の規定となり、正義は如實の知見を以て我を犠牲として如實の聖意實現として活動す。恩寵は衆生の知

見を開發し解脫靈化の靈能として實現す。斯の三能は如來の中に如實の行爲せしめんが爲に啓示とす。

四智三能如來の徳相なりと觀じ、之を反映して客化して啓示とす。

斯の如き啓示の如來は表號的擬人觀となる。如來は智慧慈悲神聖正義の萬徳圓滿の表明を以て宗教意識に對して觀ぜらる。

如來萬徳豐備として衆生の心靈に知見を與るは報身の徳なりとす。

直觀は具象的にして、寫象は抽象的にして説話的なり。一は感覺態にして他は超感覺なり。斯の如きの觀念は宗教意識には宇宙全體如來にして神聖正義慈悲等の衆生に儼臨することは常に宗教的意識を充塞す。

三、法身、理想的啓示

報身觀にて宇宙は如來の内容として觀念し、次に如來の本質なる法身を觀ず。

如來の法身は清淨本然にして、法界の體性にして、自性天真は絶對無限、永恒自存、心靈態、無始無終、本有の體、超絶無寄。冥想觀念は總括總合的觀念態なり。空想感覺に超越し、また寫象にあらず

超感覺理想體なり。